

スゴイ農業、スゴイJA
JA自己改革の現場から

地域でもり立てる 丹波大納言小豆

—JA丹波ひかみ（兵庫県）の
丹波大納言小豆の産地振興の取り組み

JA全中 広報部

丹波大納言小豆の産地振興を目指し、農業所得アッププランの取り組みを開始。取り組みに当たっては、JA、丹波市、兵庫県で設立した「丹波大納言小豆ブランド戦略会議」で3者が密接に連携し、JAと生産者、行政が一体となっています。

JA丹波ひかみは兵庫県の中央東部に位置する丹波市を管内とするJAであり、JAの基



JAのとれたて野菜直売所とJA本所



イメージキャラクター「丹波のあずきー」とイメージを強化するのほり

本理念は、「^{ゆめ}希望とうるおいのあるまちづくり」である。

「丹波を冠した特産品としては、丹波大納言小豆のほか、丹波栗、丹波黒大豆、丹波山の芋があります。この4品目に丹波市産コシヒカリを加えるとJAの主要5品目です」とは、JA丹波ひかみ営農経済部営農振興課係長（専任営農相談員リーダー）の久呉直哉さん。

いずれの品目も高い評価を得ており、JAのブランド米「丹波ひかみ米」のほか、特別



左／丹波大納言小豆には、表皮が薄い、大粒である、煮ても崩れにくい、光沢が美しい、糖分を含み味がよいといった特徴がある
中／畝たてなど排水対策が重要 右／春日町東中に立つ「大納言小豆発祥之地」記念碑

栽培米「夢たんば」はANAファーストクラスの機内食にも採用された実績がある。

中でも、丹波大納言小豆は大粒で上品な甘みが特徴で、和菓子などの原料として全国的にも高く評価されている。お菓子屋さんからよく聞くのは、「丹波大納言小豆は口の中に皮が残らない」という評価だと、久呉さんは自信をのぞかせる。

そして意外な特徴は、立つほどの俵形であること。円筒形で末端部が角張っていることから縦に積んで遊べるほど。久呉さんは、「上手い人なら5つ重ねて立てられます」という。うまく立ったら、写真を撮って、インスタグラムにあげてもよいかもしれない。若い世代、子どもたちが関心を持つような話題づくりを考えている。



大納言小豆は5つ重ねて立てられる

この4月末に丹波大納言小豆が丹波市の「トップブランド」になったことも特筆される。丹波市が発祥の地とされる大納言小豆は、最も丹波らしい、丹波市を代表する逸品であると市の協議会が認定し、それを市全体の中心に据え、市を挙げての街づくり、地域の活性

化に取り組んでいくことが決定された。

丹波大納言小豆は、丹波地域を代表する特産物であり、記録に残されているだけでも、約400年にわたる歴史がある。そして現在、丹波市は全国の市町村別で、最大の作付面積を誇っている。

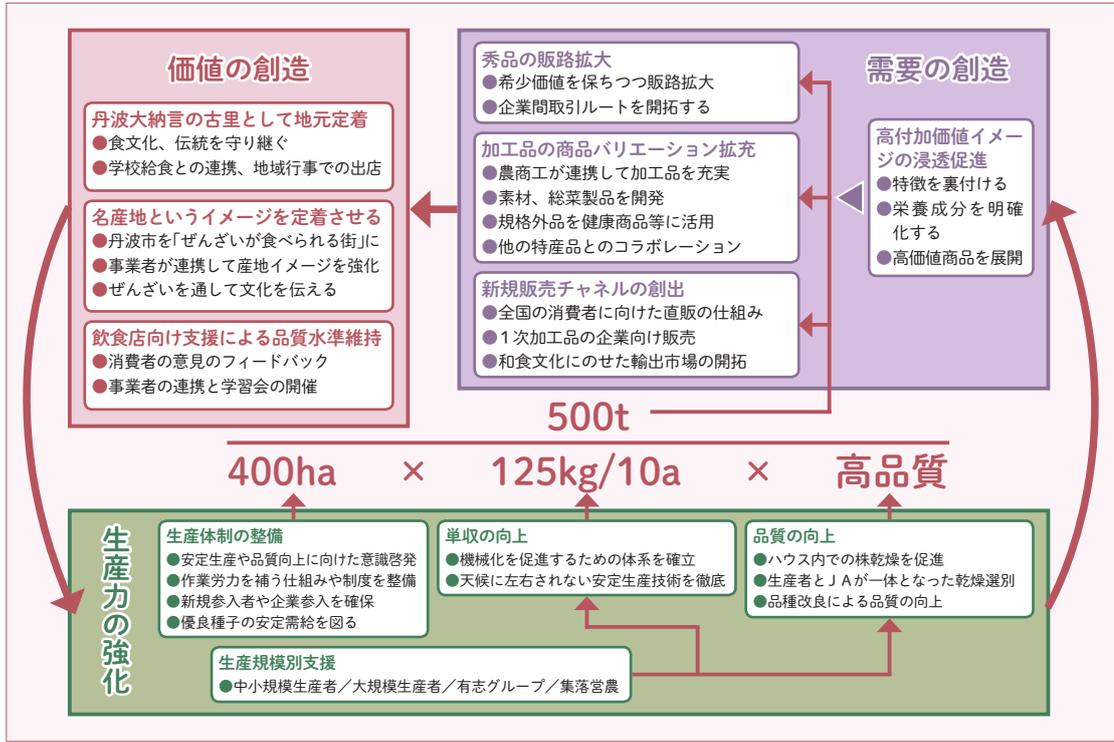
丹波市には、「シティプロモーション推進室」という部署が平成29年5月に設立され、さまざまな地域のPRなどを検討している。いわば丹波市の「一押し」として丹波大納言小豆がその中心を担っている。

生産力強化に向け 新たな生産者団体の立ち上げ

JAでは丹波大納言小豆の産地振興を目指し、農業所得アッププランの取り組みを開始している。

取り組みに当たっては、JA、丹波市、兵庫県で設立した「丹波大納言小豆ブランド戦略会議」で3者が密接に連携し、JAと生産者、行政が一体となって取り組んでいる。丹波大納言小豆ブランド戦略会議はJAが事務局となり、「丹波大納言小豆ブランド戦略マップ」(次ページ参照)には、「一粒へのプライド」をモットーに、直近の方策から10年後の

丹波大納言小豆ブランド戦略マップ



方向性（目標イメージ）までが描かれている。

JAの産地振興方策は、「TAP21（JA丹波ひかみ 第9次 営農振興3カ年計画2016－2018）」に基づいて進められている。

さらなる生産拡大を目指すべく丹波大納言小豆生産振興会が立ち上げられ、7月7日に設立式典が執り行われる。

同振興会で会長を務める中出靖大^{なかでやすひろ}（38）さんは、丹波大納言小豆生産振興会の会長として、「丹波大納言小豆の産地を維持発展させるために、生産農家が栽培に関する相互の情報共有と技術研さんにより安定生産および品質向上を目指すとともに、会員相互の交流を促し、仲間づくりをすることで生産意欲の高揚を図っていききたいです」と話す。それが、振興会の目的でもあり、規約にも定められているという。また、「今回の役員候補者の中でも私の年齢が一番若いのですが、経験のある方々に支えていただきながら、新しい取り組みなどにも挑戦していききたいです。熟練者から経験の浅い方、高齢者から若年者まで世代間をつなぐ活動ができればと思っています」と意欲をのぞかせている。

自身の法人経営（なかで農場合同会社）としても、昨年は120aほどだった丹波大納言小豆を今年は140aほど作る予定で、生産拡大を目指す。生産者団体の代表として、JAや行政と共に「丹波大納言小豆」の産地として、丹波市を全国に広めていきたいと考えている。

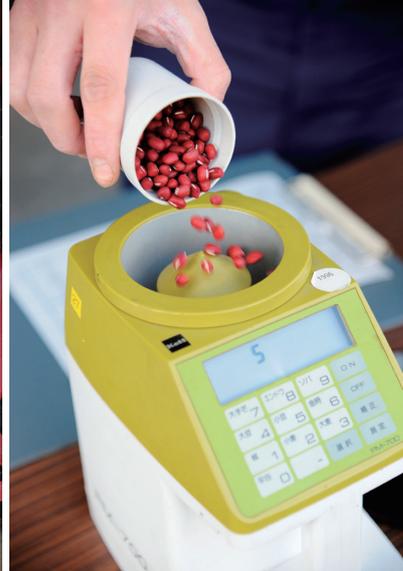
生産者の労力軽減支援

圧倒的なブランド力を持つ丹波大納言小豆だが、実は、ここ4～5年ほど不足状態が続いている。台風や大雨、病害虫の影響などにより不作が続いたからである。

「小豆の花がいっぱい咲いて、豊作だと思っていたら、昨年は10月に台風が2回来てしまいました」と久呉さんは悔しさをにじませる。

小豆は長期保存できる品目で、取扱業者は価格動向を見ながら販売するが、そうした在庫も払底してしまっている。目下の課題は、実需者の要望数量に応えられるような丹波大納言小豆の生産力の強化だ。

生産者の高齢化や、「選別作業が大変で栽培面積をなかなか拡大できない」という声も出ており、高齢化や選別作業の負担の大きさ



左／振興会会長の中出さんは元JA職員で、これからの地域を担う認定農業者 中／JAでは水分量や品質などを11月から約3か月休みなく検査する 右／むしろで小豆を乾燥させる。近年はハウスでの乾燥にも助成制度がある

が課題となっている。こうしたことから、さまざまな支援策や助成が取られている。

生産者の負担となっている手作業による選別作業については、色彩選別機をJAで4台導入し生産者に利用してもらうことで労力軽減を図る。併せて、利用料の助成などの支援策も導入した。

丹波大納言小豆は雨による湿害や害虫の被害を受けやすい。そのため、例年と同じように作業をしても、近年多発している天候不順などの影響により生産量が安定しない。これに対して久呉さんは、「排水対策、適期播種、害虫防除の原点に戻り作業を徹底していくしかなく、そうすることで天候不順があっても、収量を確保できるようにすることです」と語る。今年度は新たに「目標単収達成奨励」の助成を導入し、生産意欲の向上を目指す。

湿害や害虫の被害から丹波大納言小豆を守るには、圃場の溝掘りによる排水対策や適期防除による害虫対策が重要となる。JAでは高齢化などにより対策の徹底が難しくなった生産者の溝掘り作業を請け負うことで生産者の労力軽減支援に取り組んでいる。

小豆生産アドバイザーの設置

JAでは、通常の営農指導員やTACによる指導に加え、丹波大納言小豆を栽培する優れ

た熟練生産者を「小豆生産アドバイザー」に任命し、生産技術を次世代に継承している。

「5人のアドバイザーは、JA職員と一緒に圃場巡回をしたり、栽培講習会でポイントを話してもらったりしています」と久呉さんも信頼を寄せている。

丹波大納言小豆に欠かせない排水対策には、リターンデッチャ（溝掘機）を使うが、どうしても手作業でなければできない箇所が必ず出てくる。畝の連結や機械でできなかった部分の溝掘りで、「ここは大変だけど必ずやったほうがいい」という生産者ならではの具体的な勘所を伝えてもらい、品質の向上や生産量の安定を目指している。

JAでは、他の特産品についても生産アドバイザーを設置しており、地域の財産である特産品の優れた生産技術の継承を進め、共に産地を盛り上げていく仕組みとなっている。

新たな需要創造と

地域住民への郷土の魅力発信

丹波大納言小豆は和菓子業界をはじめとして、最高級の小豆として認識され、その大部分が京阪神へ出荷される。一方で地元では、ライフスタイルの変化から月の1日には小豆を入れてご飯を炊いたり、春と秋のお彼岸に小豆菓子を家で作るといった風習が少なくなっ



丹波大納言小豆ぜんざいフェア

丹波市内の飲食店
38店舗が
参加!

丹波大納言小豆発祥の地
丹波市がこの秋も

ぜんざいの町に

フェア開催期間
2017年
11月3日(金・祝)~
2018年
2月4日(土)

問合せ
丹波大納言小豆ブランド戦略会議
ぜんざいフェア担当 株式会社ご近所
TEL.0795-78-9603

ぜんざいマップのダウンロード
<http://magocoro.tamba.sc/>
丹の産農・産・人 now

主催:丹波大納言小豆ブランド戦略会議

左上/小豆茶はJA直売所でも販売
左下/市内の「夢のりやながわ 本店」の手作り栗最中。丹波大納言小豆の風味を味わえるよう、食べる寸前にあんを皮に自分で詰めるこだわり最中
右/ぜんざいフェアのチラシ

ており、丹波大納言小豆を食べたことや目にしたことがない市民も多いという側面もある。

地域住民に丹波大納言小豆の魅力を再認識してもらおうとともに、「丹波大納言小豆の町“丹波市”」を市の内外にPRするため、丹波大納言小豆ブランド戦略会議に需要創造部会が設置されている。

例えば、丹波大納言小豆を使用したさまざまなレシピのぜんざいが味わえるイベント「丹波大納言小豆ぜんざいフェア」を市内飲食店との連携により開催し、新たな需要創造に取り組んでいる。

また、学校給食に食材提供を行い、丹波大納言小豆を使ったあんぱん給食やぜんざい給食が実施され、子どもたちに味わってもらうこ

とで、郷土に対する誇りと愛着を育み、地産地消の促進を図っている。

6次産業化にも取り組んでいる。丹波大納言小豆を使った小豆茶を開発、ポリフェノールが含まれ、ノンカフェインで小豆の香りが楽しめる。ティーバッグのほか、ペットボトルも商品化された。

市内で丹波大納言小豆を使った商品を購入できる20店を紹介したパンフレットも制作された。その中から、特に薦めてもらった市内の菓子店に寄った。地元の特産物である丹波大納言小豆と丹波栗を組み合わせた地元にはかない商品が販売されており、そうした特色ある商品を求めて観光客も訪れるという流れができていたようだった。

農業・地域・JAを担うリーダーの雑誌



9月号 定価 606円(税込)

JAグループ 家の光協会
〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11
TEL:03-3266-9002 FAX:03-3266-9047
<http://www.ienohikari.net>

特集 諦めるのはまだ早い 有害鳥獣を包囲せよ!

多くの集落や産地で対策を施していますが、鳥獣被害は悪化の一途をたどっています。しかし、諦めることは産地の発展を諦めること。もう一度集落の環境を確認し、効果的な対策につなげるためのヒントを探ります。

できる農家は始めてる!? 軽減税率に備えよう

2019年10月、消費税率が10%にUP。低所得者配慮の観点から、消費税の軽減税率制度が実施され、23年からは、適格請求書等の保存を仕入税額控除の要件とする「インボイス制度」が導入される予定です。直売所運営や直接販売を行う農業者の視点から、変更点のポイントを整理します。

(タイトル、内容は変更することがあります)